氏　　名　岩田文昭（いわた ふみあき）
学位(専攻分野)　博　士　(文　学)
学位記番号　論文博第386号
学位授与の日付　平成12年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　フランス・スピリチュアリスムの宗教哲学

論文調査委員　(主査)教授 長谷正當　教授 藤田正勝　教授 杉村靖彦

論文内容の要旨

本論文は，フランス・スピリチュアリスムの思想潮流に立ち入り，宗教哲学の観点からその内部における問題連関を究明し，それを一つのまとまった像として提示したものである。フランス・スピリチュアリスムを一貫した観点から捉えることを通して，本論文は，近現代における哲学と宗教との関係の枠組みを原理的に考察し，人間の全体的あり方を問い直すための新たな視点を獲得することを目指している。この目標に到達するために，本論文は，フランス・スピリチュアリスムをメーヌ・ド・ビランの投げかけた宗教哲学的問いに対する創造的回答として捉えることをその方法として選んでいる。この方法は，スピリチュアリストの思想をビランの問いに対する一つの答えの可能性として捉え，その角度からかれらの思想の意義を究明するものである。

本論文は七章から構成されており，メーヌ・ド・ビラン（1766－1824）をはじめとして，ラヴェッソン（1813－1900），ラシュリエ（1832－1918），ベルクソン（1859－1941），ブロンデル（1861－1949），ナベール（1881－1960），リクール（1913－）の宗教哲学が考察の対象とざれている。

第一章では，従来の研究者が提示してきたフランス・スピリチュアリスムのさまざまな定義・捉え方を考察しつつ，本論文がとる方法の正当化をはかる。まず，1868年に刊行されたポール・ジャネの論文を取り上げ，スピリチュアリスム生成時におけるその基本的動向を明らかにする。ついで，コプルストン，グイエ，コタン，ナベール，増永洋三がなした先行研究を踏まえながら，スピリチュアリスムの流れを二つの系統――本論文が〈直観のスピリチュアリスム〉と〈反省のスピリチュアリスム〉と名づける二系統――に区別して捉えることを提案する。前者の系統は，「生命」を「精神性」に本質的なものとみなし，「精神性」にもとづいた一元論的な宇宙論を形成する点にその大きな特色がある。後者は，「主体の働き」に「精神性」の根本的要素を認め，その「働き」を中心に超越的なものを捉えようとする点に特徴がある。スピリチュアリスムを二系統にわけそれを具体的に解明することは，本論文全体を貫くテーマとなるものであり，この解明を通して，ビランの宗教哲学の射程を明確にし，スピリチュアリストの宗教哲学的意義を鮮明にすることが目指されていく。

第二章では，メーヌ・ド・ビランの思想を検討し，かれが投げかけた宗教哲学的な問いの内容が明らかにされる。ビランは「自我」の働きを中心に据えた体系的哲学の構築を試みたが，その晩年には宗教哲学上の困難に出会った。その困難を，論者は二重の問題が折り重なったものとして究明する。すなわち，第一に「自我」と「非意志的なもの」からなる二元論的立場をビランが保持していたという問題を剔出し，そこに宗教的生を導入しようとした第二の問題が重なったところに，ビランの思想的困難の原因があることを指摘する。

ところが，ビランの思想はその内に困難を孕んでいただけではなく，後の世代に新たな思索を呼び起こすものを含んでいることを，論者はさらに明らかにする。すなわち，第一に，ビランが身体の抵抗を不可欠の構成要素とする「努力」という「原初的事実」において「自我」を捉えている点に着目し，ビランの思想には，「自我」を内的で純粋な領域に封じ込めず，〈身体的なもの〉〈感性的なもの〉に開かれた次元で「自我」を捉える可能性が秘められていたことを示す。第二に，ビランのシーニュ理論の意義が考察される。ビランのシーニュ理論のうちには，シーニュという感覚的存在を介して，自己を捉え返すという主張が含意されていることを解明する。

第三章，第四章は，〈直観のスピリチュアリスム〉に属する二人の思想家，ラヴェッソンとベルクソンを論じる。第三章では，ラヴェッソンの『習慣論』を取り上げ，かれがビランの思想を創造的に変容し，独自の自然観を背景にその宗教哲学を構築したさまが明らかにされる。すなわち，ラヴェッソンは，二元論的立場を前提にしていたビランの「努力」の内容を換骨奪胎して，意志が自然と有機的に結びつく一過程と位置づけたこと，そしてこの新たな努力観に基づき一元論的な自然観を構築し，そこにおいて「神」を捉えたことが示される。

第四章では，ベルクソンの思想を〈努力観の深化〉という観点から考察し，壮大なコスモロジーとして花開いたスピリチュアリスムの一つの頂点が提示される。まず，『物質と記憶』の努力論を考察し，この著作では「努力」の捉え方が不十分であり，このことが努力観の深まりを要請していることを示す。ついで，『創造的進化』と『二源泉』において，努力観が深化・拡大されているさまを解明する。ベルクソンには〈現実的次元〉で働く努力を捉えるだけではなく，その〈潜在的次元〉への眼差しがあることに考察の焦点があてられ，二つの次元をベルクソンが認めていたことの意義が探求され，この〈潜在的次元〉への眼差しがあるがゆえに，生命と物質との二元論を超えた根源的な存在論を切り開きえたことが示される。以上の考察を踏まえて，ベルクソンの宗教哲学の特色をその芸術論と対比させながら考究する。ベルクソンは〈行為を成り立たしめている根拠〉に主眼をおいた研究を展開しているために，「純粋状態での神秘主義」において宗教の本質を捉えようとしたことが解明される。しかしながら，〈行為が実現される地点〉をもベルクソンは見据えているがゆえに，現実に存在する宗教を分析し，その原理を解明することで宗教批判をなしていることも示される。かくして，ベルクソンの〈新しいスピリチュアリスム〉が「実証的形而上学」として展開したことの意義が鮮明にされる。

第五章，第六章は，〈反省のスピリチュアリスム〉の系譜に属するラシュリエとブロソデルについて論じる。第五章では，ラシュリエの思想を〈反省のスピリチュアリスム〉の過渡的な一局面として位置づけ，かれのいう「反省」の意味を明確にしながら，その思想の問題点を指摘する。すなわち，感性的要素が「自我」に対していまだ積極的関係を結んでいない点に問題を認めるのである。第六章では，〈反省のスピリチュアリスム〉の系譜の中で体系的な宗教哲学を開花させたブロンデルの『行為』を考察し，ブロンデルが〈行為の自己反省〉によって，〈哲学の深化〉をなすとともに〈人間と宗教との必然的関係の解明〉をなしていったさまを明らかにする。まず，ブロンデルの「反省」は「実践の知」と「実践の学」との有機的連関からなりたっていることが明らかにされる。すなわち，人間が生きていく上で不可欠な「実践の知」を前提にした上で，「反省」によって「実践の学」を提示する哲学者ブロンデルの姿が描かれる。そして，ブロンデルのいう「反省」は，自己自身のあるべき一致を目指してなされるものであることが示される。ついで，『行為』における，身体に関する「反省」が考察される。ここにおいてはとくにビランの身体論と対比させて，二元論の枠組みに規定された身体論を打ち破っていくさまが解明される。さらに，「シーニュ」という観点からブロンデルの宗教哲学の一面を鮮明に浮かびあがらせる。ブロンデルは，ビランのシーニュ理論に萌芽的に含まれていた〈シーニュを媒介にする自己理解〉という思想を展開させ，リクールの解釈学に近い立場を切り開いている。しかし，ブロンデルにおけるシーニュ理論は自己自身の不均衡を克服するための道程に位置づけられており，リクール解釈学とは一線を画するものであることが指摘される。そして最後に，ブロンデルの「反省」と「宗教」との関係が考察される。すなわち，ブロンデルにおいては，自己自身の一致という実践的観点から，「超自然的なもの」の受け入れが要請され，さらに教義・掟・儀礼などの実践的規定が不可欠とされていることが示される。

以上の考察を経て，ベルクソンとブロンデルの思想を「無」の問題を中心において対比させ，両者の宗教哲学の特色を改めて明確にする。ベルクソンは，「無」を哲学的には疑似問題とし，まっすぐに「存在」へとむかうことを強調する。それに対して，ブロンデルにおいては「無」が否定的媒介としてつねに反省に伴っており，かれの哲学に不可欠な要素となっている。このように「無」の問題へのアプローチの違いという観点から，両者の思考は普遍性をもつ思考の二つの原型となりうることを浮き彫りにした上で，かれらの思想の共通の枠組みが指摘される。

第七章では，フランス・スピリチュアリスムとの関係，とくにナベールとの関係に着目して，リクールの解釈学を考察する。本論文で一章を割いて，現代の思想家リクールを論じるのは，スピリチュアリスムの現代における意味を一人の思想家の具体的な思索を通して，捉え直そうとしているからである。この論述は以下のような三つの部分で構成されている。第一に，〈直観のスピリチュアリスム〉，とくにラヴェッソンとの関係を中心にリクールの思想を論じる。自由と自然とが宥和しない可能性への洞察が不充分であるという批判，とりわけ「悪」の問題が提起する重大さへの顧慮を欠いているというラヴェッソンへの批判をリクールの思想から読み取る。ついで第二に，ナベールとリクールとの関係を考察し，リクールの解

釈学が〈反省のスピリチュアリスム〉から継承した内容を示す。すなわち，リクールの人間学がナベールから決定的な影響を受けたことを明らかにし，〈反省のスピリチュアリスム〉が現代に展開した一つの事例としてリクールの解釈学を捉えることができることを示す。第三に，リクール解釈学と〈反省のスピリチュアリスム〉との相違点を考察する。まず〈反省のスピリチュアリスム〉以外に二つの契機——〈言語に対するリクール独自の思想的態度〉と〈現象学的方法の影響〉——がリクール解釈学成立に不可欠であったことが解明される。その上で，〈反省のスピリチュアリスム〉から距離をとったリクール解釈学の積極的側面と問題点とを考察する。すなわち，一方で，〈反省のスピリチュアリスム〉に比して，リクール解釈学は〈学〉としての射程を拡げた点にその積極的意義を認めることができる。ところが他方，そのことによって〈現実に生きる自己〉との乖離が生じてきたことが指摘される。かくして，スピリチュアリスムの追い求めた〈あるべき人間〉への問は，いまなお問いとして追求されるべきものであることを，本論文は最後に提起する。

論文審査の結果の要旨

本論文は宗教哲学の観点からフランス・スピリチュアリスムの全体像の把握を企てたものである。フランス・スピリチュアリスムは，18世紀末から20世紀前半にかけてフランスの哲学思想界において，メーヌ・ド・ビラン，ラヴェッソン，ラシュリエ，ベルクソン，ブロンデルなどの思想家によって発展・継承された思想潮流であり，その思潮の核心をなすものは，現代ではナベールを経てリクールの解釈学のうちに形を変えて流れ込んでいる。この思潮は，それが取り組んだ問題の質や多様性において，ドイツ観念論とも対比されてきたが，うちに多様な思想家と多くの分流を含んでいたために，その全体像を描くことは容易ではなく，多くの試みは一面的なものないし概略的なものに止まった。実際のところ，フランス・スピリチュアリスムの研究はフランスではその枚挙に遑なく，また我が国においては西田幾多郎や九鬼周造を始めとして沢潟久敬や増永洋三らの先行研究があるが，それらはフランス・スピリチュアリスムの全体を一貫した問題意識のもとで追究したものではなく，結果として一つの像を示すには至らなかった。

本論文において論者は，メーヌ・ド・ビランによって提示された問題をその後のスピリチュアリストの思想家たちが如何に捉え，解決をはかったかを宗教哲学的観点から究明し，フランス・スピリチュアリスムを貫いて発展・継承されてきた問題連関を明らかにすることによって，その全体像を見事に描きだしている。フランス・スピリチュアリスムの全体像を描き出した本論文は，我が国におけるフランス・スピリチュアリスムの研究水準を高めたものとして大きな意義を有する。

本論文が有する独創的な知見ないし特徴として次の諸点があげられる。

第一。論者はフランス・スピリチュアリスムの流れのうちに，二つの異なった思想系統を見分け，そのことによってスピリチュアリスムの思潮をその起源から現代にまで辿ることを可能にするような視点を開いたということである。従来，スピリチュアリスムの全体的把握を困難にしてきたものは，そのうちに含まれている両立しがたいと思われる思想傾向に対して明確な表現を与える視点をもたなかったことにあり，そのために全体像はぼやけたものとなるか，あるいは部分的・一面的なものとならざるをえなかった。論者はフランス・スピリチュアリスムのうちに潜む二つの傾向を，グイエの言葉にならって「精神性のなかに生命性が内属していることを認めるスピリチュアリスム」と「生命性とは根本的に異なった主観性によって精神性を定義するスピリチュアリスム」として捉え，前者を〈直観のスピリチュアリスム〉とし，後者を〈反省のスピリチュアリスム〉と名づける。そして，この二つの系統はもともとメーヌ・ド・ビランの思想に含まれていた可能性が二つの方向に追求されたものであるとして，〈直観のスピリチュアリスム〉のうちにラヴェッソンとベルクソンを，そして，〈反省のスピリチュアリスム〉にはラシュリエとブロンデルを配列して，それぞれにおいて追求された宗教的超越の特徴を明らかにする。論者がスピリチュアリスムのうちに導入したこの区分は，これまで曖昧なままに覆われていたスピリチュアリスムの問題連関を明らかにし，その全体像を摑むことを可能にしたという点において，大きな意義を有する。

第二。論者はスピリチュアリスムを過去の方向に辿るだけではなく，それと現代の哲学との関わりを追求している。ブロンデルやナベールに見られる〈反省のスピリチュアリスム〉は，現代においてリクールの解釈学の哲学のうちに入り込んできており，スピリチュアリスムの現代的形態とも言うべきものがリクールの解釈学であることを論者は明らかにしている。現象学や解釈学的方法のもとに立つポール・リクールの哲学をスピリチュアリスムとの繋がりのもとに捉えることには意外の感もあるが，論者は，意識の反省を中心においたラシュリエの抽象的な反省が欲望や意志を中心にしたナベールやブロンデルの具体的反省となり，その具体的反省が現代においてリクールの解釈学となって現れていることを明らかにする。反省

の具体化という方向を取り出すに当たって注目される点は，論者がメーヌ・ド・ビラン，ブロンデル，ナベール，リクールの反省において捉えている「シーニュ」の位置の重要性である。スピリチュアリスムを現代の思想との繋がりにおいて追求することを可能にしているものも，この「シーニュ」への注目である。

第三。論者は，ベルクソンの哲学を「努力」という観点から統一的に捉え直すことによって，ベルクソンとメーヌ・ド・ビランの思想との繋がりを明確にしている。ベルクソンは初期の『意識の直接与件論』から中期の『物質と記憶』をへて後期の『創造的進化』や『道徳と宗教の二源泉』に至るまでの思索を貫くものとして「持続の直観の深化・拡大」をあげているが，それぞれの著作において「行為」に与えられている意味が異なるために，「持続の直観の深化・拡大」は「努力」という観点から十分に捉えられなかった。論者は『物質と記憶』における「努力」の原理的考察の不備を補うという仕方で『物質と記憶』を読み直し，宇宙を貫く精神の働きを「努力」という観点から統一的に把握している。論者のこのベルクソン解釈は説得的であり，意義深いものである。

スピリチュアリスムの全体的把握を目指した本論文は多くの洞察を含み，高く評価されるべきものであるが，しかし，本論においてなお望むべきところがある。それは反省のスピリチュアリスムにおける「シーニュ」と「根源的肯定」との連関を宗教的超越という観点から究明するところになお不徹底なところが残されているということである。もう一つは，ベルクソンの哲学を「努力」という観点から追及することが，論者が一元論的性格をもつとする〈直観のスピリチュアリスム〉の特性を曖昧にすることになっているということである。しかし，これは論者の今後の研究において補われるべきものであって，フランス・スピリチュアリスムの二つの流れを捉えることによってその全体像を明らかにした本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年1月24日，調査委員3名が論文内容とそれに関した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。